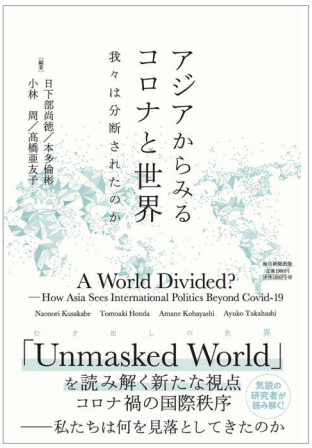
書を抱えてフィールドに出よう!



アジアからみるコロナと世界 我々は分断されたのか

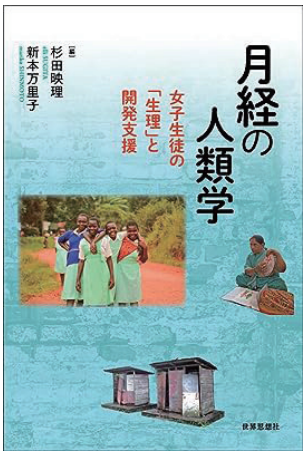
編　者：日下部尚徳／本田倫彬／小林周／髙橋亜友子
出版社：毎日新聞出版　2022年5月発行

新型コロナウイルスパンデミック以前より、米国と中国の対立は徐々に深まっていました。本書ではその対立を「エコノミック・ステイトクラフト（ES）」、すなわち「経済的な策術や手段を用いた他国に対する影響力の行使や、それによる地政学的・戦略的目的の追求」という視点で説明しています。新型コロナウイルスは、その対立をさらに先鋭化させ、各国がそれに呼応し、自国の安全や利益の確保に突き進んだため、西側欧米諸国を中心に生み出されていた「リベラル国際秩序」が大きく揺らぎました。

本書では米中の対立に加え、新型コロナウイルスに翻弄されたアジア諸国のうち、バングラデシュ、フィリピン、韓国、マレーシア、インドの５か国に焦点を当て、いかにしたたかにコロナウイルスに向き合ってきたかが詳細に考察されています。そして「我々は分断されたのか」という問いに鋭く切り込んでいます。新型コロナウイルスパンデミックにより国際秩序が揺らぎ、グローバリズムが分断されたとも言えます。また、コロナ禍でより顕在化した貧困問題など、国内でも新たな分断も引き起こされています。

日本の報道視点は、ともすれば国内問題、日米関係、東アジア情勢に編重しがちでした。しかしながら日本は今後ますます米中の対立の板挟みになることは容易に予想されます。私たちは重要なビジネスパートナーであるアジア諸国の情勢に目を向け、アジア諸国から学び、日本の進むべき道を考えていかなければなりません。その道しるべとなる、お勧めの一冊です。

（紹介者：白野倫徳）



月経の人類学　女子生徒の「生理」と開発支援

編　者：杉田映理・新本万里子
出版社：世界思想社　2022年6月発行

開発支援というと、貧困、教育、公衆衛生、水と衛生、ジェンダーなど様々な分野を思い浮かべますが、近年開発支援の場でも“Menstrual Hygiene Management”という表現が定着しています。（略語 MHM、本書では「月経衛生対処」と訳されています）日本でも「生理の貧困」が取り上げられるなど、今まで語りづらかった「生理」の課題が注目されるようになりましたが、日本だけでなく、世界各国で「生理」と向き合う機運が高まっているのだと感じました。

本書では、日本を含む８つの国々で10～20年と研究を行われている文化人類学者や研究者たちが、調査対象を学齢期の女子の生理対処に絞って、地域を限定し、フィールドワークを実施。最終的には、６つの視点①月経観、②月経をめぐる政策、③月経教育（学校教育）、④生理用品、⑤生理用品の廃棄、⑥トイレ（P286-289）にまとめられています。開発人類学の視点に立ち、「より現場に適した」開発実践のために、人類学を用いるアプローチは改めて重要であると感じられるほど、各国における状況は様々であり、同じ課題であってもニーズは様々であることを実感しました。

JICA 協力隊員時代、同じ女性であるけれども、どこか生理について聞いてはいけないという感情があったことを思い出し、この本を読んだ今なら、もう少し勇気を出して語り合えるかもしれない、と自分自身が「生理」と向き合う機会にもなりました。文化人類学や開発支援に関心のある方は必読の本ですが、たくさんの人に手に取って頂きたい一冊です。

（紹介者：福井沙織）